2004.8 No.7
さちこのニュースレター

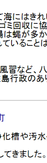
小笠原諸島へ行ってきました ── 2004年6月24日～29日

今年で23回を数える小笠原親善訪問。「来年から超高速船テクノスーパーライナー・オガサワラの就航が決まり今年が最後になる」との情報が出ましたが、住民196人、町の職員、議会からは小笠山建議員と私の計202人が参加しました。

中、船上で戦没者追悼行事が行われ、南部前に戦争の犠牲となった八丈島民57人に対して、慰霊の献花をしました。

戦争の記憶　髪が後ゆるよりも目射しに迎えられ、父島に上陸。村議会担当者の出迎えと案内で、3日間かけて父島と母島を視察しました。島にはたくさんの美しい入り江があり、泳ぎやすい砂浜が海水浴場になっています。かつてアメリカの統治下にあったために、開放的であり抜けた町並みも印象的でした。しかし同時に、いたるところに戦争の傷跡が刻まれています。1944年(昭和19)の強制疎開から2年後の復帰にいたるつらい歴史も、村の方々からしかに聞くことができました。戦後生まれの私ですが、平和であることの大切さを痛感するとともに、戦争ができる国にならないつくる日本の現状に、あらためて危惧を抱きました。

自然の宝庫　こうした戦争の記憶を忘れさせるような豊かな自然は、小笠原のあちこちに残っています。ムニガ、カツオドリをはじめ、メグロ、オガサワリカリなどの島固有の動物も生息しています。それぞれの島で資重な動植物が豊かであるとともに、ノヤギ、ノネコなどの害獣がいます。父島に隣接する南島では、数年前から手つかずの自然を守るために入島者を1日100人に制限しています。連絡船で南に約3時間の母島では、ウミガメ保護にたかりが活かれています。父島では、父島で増えて困っているやギやシロアリがいないなど環境保全に有利な条件がそろっている反面、本来の種を圧倒するような「アカギ」という移入植物に繁殖されつつあります。小笠原諸島全体で、動物も植物も移入種に少なからぬ影響を受けていることが心配でなりませんでした。



進む環境行政　一方、生活に必要な環境整備はかなり進んでいて、すでに下水道が完備されていることには驚きました。他やペット用トルのほかダンプールやゴミ処理施設などがあります。本土までの輸送料をかけての町の処理です。最新の焼却炉で燃やせるものはできるだけ焼却し、オーブン型の最終処分場には焼却灰だけを入れ、ガラス破片などは安定型の処分場に埋めのいました。汚水処理施設も整っていて海にはきれいな水が流されています。また母島では、すべての家庭が合併浄化槽の設置に協力することによって、生ゴミの堆肥化がすすめられています。堆肥工場は鶏が多かったものの、思ったより臭くなく、競馬の島でこうした取り組みがなされていることは、今後の八丈町のゴミ行政を考えるとスバらしい参考になりました。

小笠原村は、方言や食べ物をはじめ、動植物の種類や文化や風習など、八丈島と共通点が多く、親しみを感じました。また、様々な角度から離島行政のあり方を学ぶことができ、意義深い視察でした。

九州へ行政視察 ── 照葉樹林を守る宮崎県綾町

行政視察は、2班に分かれて実施されました。秋田班は合併浄化槽や汚水処理施設を、九州班はカンパチ養殖や照葉樹林保全などについて視察してきました。私は九州班に加わりましたが、そのうち特に印象に残った綾町を紹介したいと思います。

宮崎市の北西20km、森林が総面積の90%を占める綾町は人口約7600人。今から25年前には県内でさえその名を知られていない過疎の町でした。当時の町長は

まず町の名前を全国に知ってもらう必要があると考えました。そのために実践したこと

が、日本一の広さを誇る県内1700haの照葉樹林(シイ、カシなどの常緑広葉樹林)を国定公園に指定することでした。次にこの森の素晴らしさを住民に知ってもらうために、世界一の高さ142m、長さ250mを誇る「照葉大吊橋」を完成しました。照葉樹の天然林(国有林)と隣接するこれはてたんさま林(県有林)との境界

ブルーベリー

ブルーベリーは、ビタミンAの含有量が多く、目の疲れに効果があるといわれています。